

霧島温泉地域⁽¹⁾の観光、宿泊動向の現状と将来

－宿泊施設を対象とした調査結果から－

近 藤 論

本論では、観光立国としての道筋を辿りつつある産業の背景、および高速交通時代を迎えた鹿児島の観光の現状を素描するとともに、平成18（2006）年度に実施した授業科目「社会調査実習」での調査結果をもとに、観光客の受け入れ側である宿泊施設の事情を踏まえた霧島の温泉を資源とする観光のあり方を模索する。

鹿児島県は観光立県として様々な施策のもとに観光振興を図っているが、施策レベルで求められる観光振興と受け入れ側の宿泊施設で抱く観光振興とは完全に一致するものではないだろう。県外よりの宿泊客数に関する限り、九州新幹線の部分開業によるメリットは主として鹿児島市の中心都市が享受するも、周辺の観光スポットを有する地域ではその効果も顕著には見られない。様々な規模の宿泊施設を抱える霧島地区の温泉宿泊施設にとって、これからの観光を活性化するためには、交通手段の整備や情報化の活用に加えて、ソフト面での観光メニュー開発が必要になろう。

はじめに

観光という現象は、余暇活用の目的ないし手段的行動、その過程での財・サービスの移転・提供、受け入れ側に当たる地域の観光施設の整備状況、観光主体が抱く意識や選好など、量的・質的に様々な位相の重なりの中であられる。従って、「観光」を対象とした研究のアプローチは、観光による地域への経済的な影響、地価や人口移動、生産波及効果や雇用創出効果などのファクターから計量するアプローチ、何が観光資源として訴求力があるのかについてのマーケティング的な観点からのアプローチ、観光の「対象」となる地域に向けられる「視線」（取り上げられ方）を扱うものなど、学際的に多様な方向性を包含しているといえる。

本論では、観光客の受け入れ側であり観光振興の担い手となる主体が誰であるのかということを重要視したい。つまり「多くの観光客を受け入れられるよう、創意工夫」するのは誰なのか、ということである。観光について、特に「振興」

をうたう主体は、政府であり、観光地を抱える自治体であり、それにより利益を得たいと考える観光関連企業であろう。経済的な利益を得るという側面に関する限り、直接、間接に観光に関連した業界がその主体ということになるだろう。一方、現実には観光客を受け入れるという観光における相互作用過程に注目すると、主体は宿泊施設であったり、地域であったり、そこに住まう人々でありもする。

観光を「する」スタイルがそれぞれであるように、観光客を受け入れる側もそれぞれの「もてなし」のスタイルがある。多くの観光客を受け入れたいという期待を持つところもあれば、少数の客に対して可能な限りのサービスを提供したいというスタイルを堅持したいというところもあろう。様々な受け入れ側のスタイルを無視した「観光振興」を推進すれば、現状の観光機会やサービス提供のバランスを壊すことになりかねない。特に、近年の競争原理導入による様々な領域、業種での再編成、変革を目の当たりにすると、その地に根付いていることで価値を持つ観光地ですら、予測できない将来が訪れるかもしれない。

本論では、「振興」施策の陰に回りがちではあるが、観光を担う最も重要なキャストである宿泊施設に焦点をあてて、施策と現状との「距離」を見つけ出すことを目的とする。その意味では、本論は、客観的なバランスを視野に入れた観光研究ではなく、あえて観光客の受け入れ側の実状のみに焦点を置く、偏った視野からの分析であることを断っておく。

1. 観光立国への道筋

1・1 観光産業成熟の背景

国家レベルでの観光産業振興策の画期として、平成18(2006)年12月に議員立法により「観光立国推進基本法」(平成19年1月1日施行)が成立した。同法では、「地域における創意工夫を生かした、地域社会の持続的な発展を通じた国内外からの観光旅行の促進を図るための施策、人材育成、環境整備などがうたわれている(国土交通省総合政策局観光部門ホームページより www.mlit.go.jp/sogoseisaku/kanko/061220kihonhou.html)。今や、時代は「もの」から「ソフト」や「コンテンツ」へと消費対象を変えつつある。

観光が政策レベルで脚光を浴びることになったのは、それほど新しいことではない。昭和26(1951)年の国内航空便の運航開始(東京-大阪間、大阪-福岡間、東京-札幌間)以降、昭和31(1956)年の国鉄(現 JR)の東海道線全線電化、昭和36(1961)年の国内線へのジェット機就航、昭和39(1964)年の東海道新幹

線、名神高速道路開通といった高速交通のインフラ手段が整備され、国内での移動が一挙に加速化されたことが背景になっている（松橋 2002:155）。あわせて、海外旅行の途も昭和39（1964）年に個人の海外渡航が自由化されることにより、翌40（1965）年に日本航空より「ジャルパック」と称された海外旅行パッケージ商品が販売されるなど、高度成長期の只中に、すでに「モノ」以外の消費への欲望は大いに喚起させられていた（松橋 2002:155 講談社:1997）。

昭和62（1987）年に入って、運輸省（現 国土交通省）が「海外旅行倍増計画（テン・ミリオン計画）」や「総合保養地整備法（リゾート法）」が相次いで策定・制定されることで、海外への日本人旅行の推進（アウトバウンド）と国内での大規模リゾート施設建設による余暇活動など、レクリエーションの推進による内需拡大効果を視野に入れた政策が打ち出されることとなった。「テン・ミリオン計画」においては、当時のプラザ合意による円高傾向の後押しもあって、平成元（1989）年で前年度比14.7%増の966万人の旅行者を数え、日本人の海外旅行者が飛躍的に増加した（平成2年度 運輸白書 www.mlit.go.jp/hakusyo/transport/heisei02/2/22-8-1.HTM 2007年11月1日参照）。

高度経済成長の流れを汲む開発・整備路線による後押しと、国際貿易摩擦解消、円高、内需拡大などマクロな経済状況の変化に対応するための焦点化のもとに、日本の観光が産業として注目されていくことになった。

1・2 観光へのまなざしと社会背景の変化

はじめに高度経済成長以後の観光をめぐる動向を素描しておきたい。日本経済の豊かさ、円高の中で、国内はリゾート施設への観光、国外は海外旅行を中心とした観光の主軸が構成されたように見えたが、90年代以降のいわゆる「バブル経済崩壊」を受けた景気低迷の中で、様々な業種が打撃を受けた中で観光業も例外ではなかった。あわせて、旅行に求める志向の変化もみられ、「安・近・短」といわれる金銭的に安く済み、近場で、短時間に行き来できるようなレジャーが志向されるようになった（図1 『平成14年度観光の実態と志向第21回国民の観光に関する動向調査』より近藤が作成）。

また、近年では地域の活性化や再生の目玉を観光に求め、環境保全を中心的な枠組みとする「エコ・ツーリズム」や農産漁村における体験活動を含めた「グリーン・ツーリズム」といった、地域保全型の観光が新しく注目されつつある。このような背景には、開発偏重から環境保全へとシフトしつつある地球規模の潮流、従来の団体旅行型の大型宿泊施設利用といった観光スタイルから、家族や仲の良い少人数での旅行スタイルが好まれつつあること、観光目的とされる地域の過

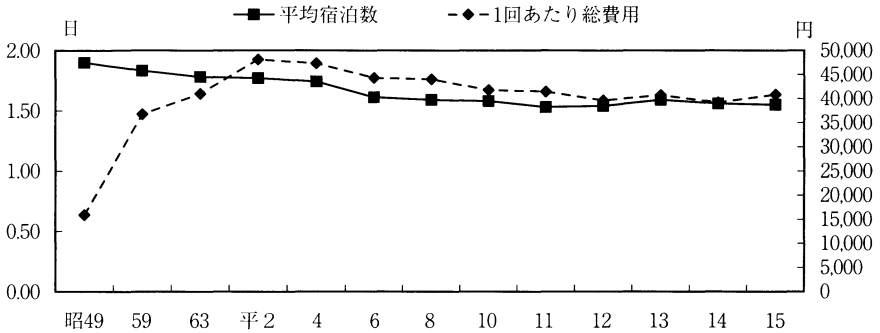


図1 宿泊観光レクリエーション(宿泊数・費用)の推移

疎・高齢化といった要因があると考えられる(高橋 2003: 97-109)。

高齢化に関しては、観光客の年齢層が高齢化するに伴い、受け入れ施設や観光地の諸施設のバリアフリー化の推進が観光施策として公共交通機関や道路・歩行空間を中心に進められ、旅館・ホテルの客室のバリアフリー化については、税制の特例等の支援措置を講じるなどして整備の促進を図っている(平成17年度版観光白書: 165-166)。

海外旅行に関しては、従来の国内観光客の海外諸国を観光目的地とするアウトバウンド型の観光から、海外諸国の観光客が日本を観光目的地として来訪することをめざす(2010年までの訪日外国人旅行者数1000万人が数値目標)、いわゆるインバウンド型の観光を推進し、「ビジット・ジャパン・キャンペーン」のPR活動に力を入れている。活動の一例として、日本と各国の観光親善大使のマスメディアなどへのCM露出、空港などで見かける「YÔKOSO! JAPAN」と書かれた横断幕の掲示、各国語で記載された各種広報資料の作成、インターネットを活用した総合的な観光交流施策などが展開されている(平成17年観光白書: 62-100)。

このように、産業としての観光も成熟期といった段階に入り、国や地方自治体、民間などの総力をあげて、国内需要の掘り起こしのみならず外国人の来日観光推進など多方面にわたり、観光の主体と客体とを新たに生み出す努力が続けられている。

2. 鹿児島県の観光の実状

平成16(2004)年3月13日の九州新幹線部分開業(鹿児島中央～新八代間)は、九州の「高速交通・高速移動」時代の画期ともいえる。同日、鹿児島中央駅～吉松駅間を1日2往復する観光列車「はやとの風」も運行され、鹿児島の観光新時代が幕開けすることとなった。

新幹線開業から遡ること9年前の平成7(1995)年より、鹿児島県では、県観光連盟、市町村、観光関係団体などで組織された観光かごしま大キャンペーン推進協議会が、「観光かごしま大キャンペーン推進事業」、観光に関する積極的な観光広報宣伝や観光誘致活動が展開されている。これは国策として勧められている「観光立国」としての方針と軌を一にするものである。先に述べた、「ものづくり」による経済成長からシフトした観光産業への政策上の傾斜に観光資源を持つ地方公共団体も呼応して、鹿児島でも新たに(再び)「観光」に成長産業としての焦点が合わせられることになり、今や外国にアピールすることのできる産業として注目を浴びている。

図2は鹿児島県の宿泊施設(ホテル・旅館)数の推移である(厚生労働省衛生行政報告例、西日本新聞社『九州データ・ブック2007』より筆者が作成)。ホテ

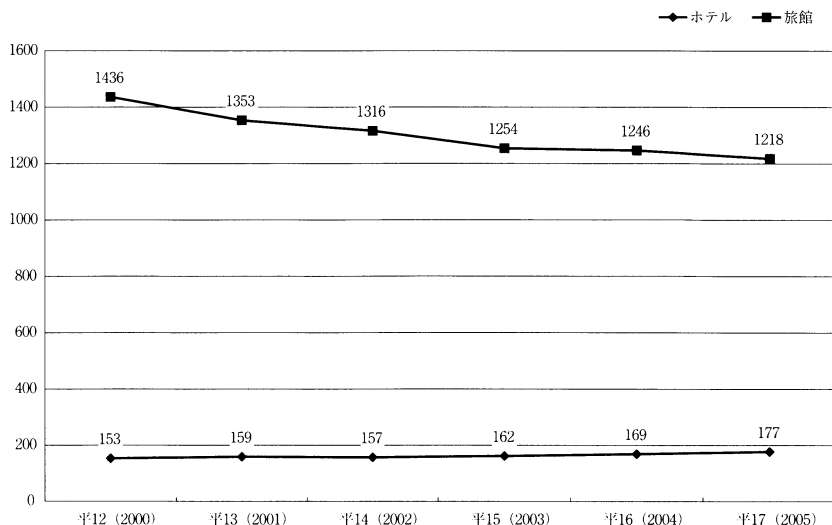


図2 鹿児島県のホテル旅館数(施設数)の推移

ルの数は新幹線開業を見込んで微増傾向にある一方で、旅館は減少傾向を見せる。出張などのビジネスマンを客層に据えた都市部のビジネスホテルなどは着実に増加しているが、観光利用を主目的とする旅館については、その恩恵を預かるに至っていないのではないか。

このように県をあげて観光振興に力を入れる一方、観光客の受け入れ体制の実状は、観光名所での立地が多い旅館での宿泊・滞在から、宿泊費用が安く抑えられる都心部のビジネスホテルを拠点とする宿泊・滞在ヘシフトしつつあるという捉え方ができるのではないか。アクセスの良い都心部を拠点として、周辺に位置する各観光地へ日帰りで移動して、都心に滞在するために戻ってくる。この傾向が進むならば、鹿児島市を中心に放射状に伸びる線に沿うような往復型観光行動が一層促進されるであろう。

鹿児島県は桜島や指宿の砂蒸し温泉など他県にはない魅力的な観光資源を持ち、高度経済成長時には新婚旅行のメッカとして、宮崎県と並んで活況を呈した時期があった。宮崎では1965～73年の間に京都－宮崎を結ぶ全一等車両の新婚特別列車「ことぶき号」が国鉄（現 JR）より運行されていたという（YOMIURI ONLINE 宮崎地域 企画・連載「駅 Miyazaki」www.yomiuri.co.jp/e-japan/miyazaki/kikaku/017/2.htm 2007年10月2日参照）。

当時では指宿や霧島など、現在ほどアクセスが決して良かったとはいえないために、それぞれの観光地での宿泊施設が盛んに利用されていたことは、当時を知る観光関連の業務に携わる者から聞かれることである。しかし、このような観光産業における「新婚旅行」景気もオイルショックの到来とともに終息することとなる。都市部では、自家用車の保有台数が伸び、東海道・山陽新幹線による高速交通を移動手段とする感覚が浸透する中、北部九州を除き、本州の都市より遠く隔たる鹿児島の観光において重要な交通手段は空路と鉄道であった。空路による移動は、鉄道で移動できる観光地より、どうしても費用の面で重い負担を強いられる。好況時にはそれほどでもないが、不況時にはそのような負担も足を遠のさせる要因になる。あわせて、前述のような円高による海外旅行費用の相対的な負担減も、南部九州への観光志向を減じさせるものとなる。そこで待ち望まれた九州新幹線開業であるが、鹿児島県における効果はいかほどであったろうか。観光に関する影響について、ごく簡単に統計資料より確認しておきたい。

図3は宿泊観光客動向（県内移動、県外より来訪分を含む）、図4は県外からの宿泊観光客地区別観光客動向の統計数値である。新幹線開業による鹿児島県へのインバウンド効果を端的に表すと考えられる県外宿泊観光客数に注目して図3

近藤：霧島温泉地域の観光、宿泊動向の現状と将来

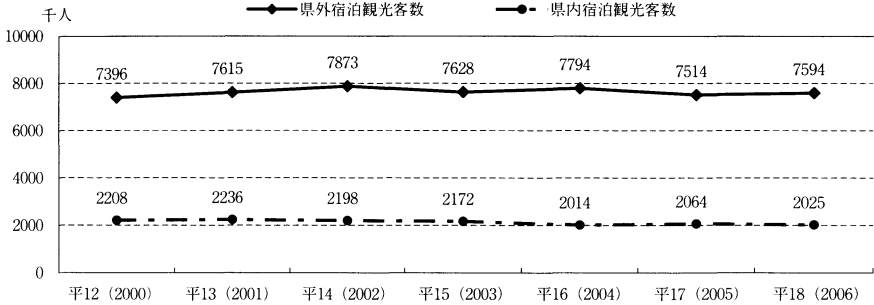


図3 県外・県内宿泊観光客数の推移

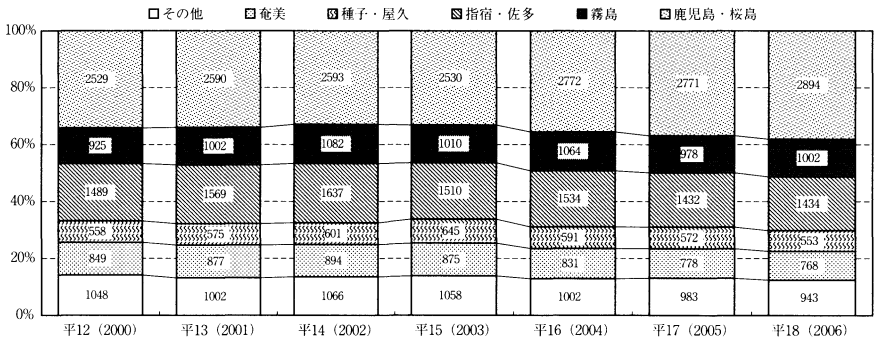


図4 鹿児島県地区別県外宿泊観光客数の推移

を見る限り、平成14（2002）年までは増加傾向にあるものの、以降4年間は増減を繰り返している。

図4でみると、「鹿児島・桜島」地区は、新幹線開業の平成14年度以降増加傾向を示しているが、「はやとの風」の運行により、新幹線効果を引き寄せたい霧島地区は、「その他」の地区を除き「鹿児島・桜島」「指宿・佐多」地区に次ぐ県内3位にとどまり、他地区とあわせて増減を繰り返す傾向を示すのみである。

図2から図4の傾向を見る限り、新幹線開業効果は、鹿児島中央駅との良好なアクセスを確保できる「鹿児島・桜島」地区に主としてもたらされ、他地区では、平成14（2002）年の一時的な増加をピークとし、以降その数値は並ぶことなくやや減少の傾向で推移している。「鹿児島・桜島」地区では多くの宿泊施設が開業

されるなど、観光客の受け入れ態勢が急速に整ったことも背景にある。しかし、観光客数の推移を見る限り、高速交通手段の開業を直接要因とする変化は、全県規模で均等な形でみられるわけではない。

このような地域別の観光客増減の要因を別の観点で探ってみる。鹿児島県の主な観光対象としては、鹿児島市内の桜島、砂蒸し温泉で知られる指宿、温暖な亜熱帯気候の奄美大島などバリエーションに富んだ観光資源がある。図4の結果は、交通アクセスやパッケージツアーによるメニュー構成、滞在可能日数などといった観光客側の要因が、どの程度、選択の余地として与えられているかによっても左右されるであろう。特に県外観光客は空路や鉄道によって鹿児島にやってくる。個人旅行の場合であれば、どこを見て回り滞在するかについては、目的とする観光スポットと利用可能な交通アクセス、許される滞在日数などの兼ね合いで決定される。つまり、地域別の増減は、単に観光資源そのものの「魅力」や「吸引力」の差異としてのみ見るのではなく、観光客側の事情を反映したものと捉えることもできるのである。

鹿児島県は多様な観光スポットに恵まれてはいるものの、個々の観光スポットへのアクセス面では、必ずしも同等の利便性に恵まれているとはいえない。自分で車を運転しない旅行者であれば、どうしても比較的アクセスが良く、効率的に見て回れる観光スポットを選んで旅行プランを構成しようとするだろう。薩摩半島に限定しても、枕崎や指宿、知覧武家屋敷と桜島、加えて霧島温泉地域と、これらを公共交通利用によって1日で見て回ることは極めて難しいだろう。各観光資源の偏りのない観光振興のためには、どうしても滞在日数がある程度費やしてもらおうか、複数回足を運んでもらうなどの努力を観光客に訴える必要があるだろう。

日本交通公社が実施した調査結果によると、全国の県別の観光客の宿泊数シェア率で鹿児島県は1泊34.6%、2泊29.3%、3泊16.5%、4泊7.4%、5泊4.8%、6泊4.3%（5泊6泊は全国1位）平均宿泊日数2.34日と、沖縄県の2.76日に次いで全国2位の数値を示す（旅行者動向2006：61）。これは、1泊から数日の宿泊まで偏りなく観光客が滞在していることを示している。

鹿児島や沖縄のように観光資源が点在して、そのどれもが短時間で見て回ることが困難な地域であれば、あえて複数泊をプログラムしたツアー・メニューを構成してアピールすることが、このような地域差を多少とも解消できるのではないだろうか。旅行会社が設定した団体旅行で訪れる観光客を除き、個人で鹿児島を訪れた観光客をどうやって各地区に引き入れるか、そのためにいかに魅力ある複

数泊メニューを作り出せるか、またそのために効率のよい交通手段をいかに確保・提供できるか。鹿児島県の観光の将来は、ソフト面での創造により潜在力を発揮しうる余地があるだろう。

3. 調査対象地域の概要

観光が施策レベルで活性化への潜在力のある「産業」として脚光を浴びる中、志学館大学の立地する霧島市は、全国有数の温泉観光地としてどれほどの集客力を持ち、観光を活性化させる潜在力を持つのか。この点を確認するため、平成18(2006)年度の「社会調査実習」において、霧島市に位置する温泉を有する宿泊施設を対象とした調査結果から考察してみたい。

調査対象は霧島屋久国立公園に位置する霧島温泉地域に位置する宿泊施設である。この地域は、霧島温泉郷、日の出温泉、新川温泉、安楽温泉、妙見温泉、日当山温泉など日本有数の温泉宿泊施設が存在しており、大型観光ホテル、自炊の湯治場、コテージまで様々な温泉利用のニーズを満たす多様な施設で構成されている。霧島市の温泉地域は、元々は湯治場としての利用が伝統的であったが、現在では多人数を収容できる観光利用客向けの宿泊施設や市街地地区にはビジネスホテルも存在しており、温泉をベースに様々なニーズに応えることができる宿泊施設を抱える地域となっている(図5)。

調査手法は調査票を用いた定量的調査で、郵送法により配布・回収を行った。手順の概要は、平成18(2006)年9月下旬に葉書にてあらかじめ調査実施についての周知を図り、10月8日に調査票を発送、10月27日を期限として回収を行った。

111施設を対象に質問紙を郵送して(2件は宛先不明で返送されてきた)、62件から有効回答を得ることができ、回収率は55.9%であった。繁忙期を避けて、比較的観光客が少ない時期を調査時期に選んだつもりではあったが、むしろ秋が深まる頃が客足も増えるとの情報を後で得たことから、事前の調査時期選定に無理があったため、回収率が伸び悩んだと思われる。

質問内容は、宿泊施設の概要をはじめ、客層、

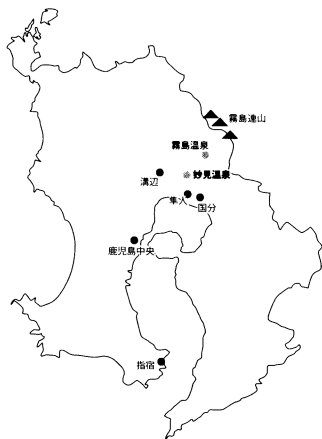


図5 本調査対象の位置

施設での交通手段の確保、ホームページの活用状況、バリアフリー・外国人受け入れ体制の整備状況、霧島の観光振興に必要な要素などで構成され、地域の観光を担う重要な役割を果たす宿泊施設の利用状況や、施設側が期待する観光客像、JR九州の運行する観光特急「はやとの風」による利用客動向などの把握を目的とした。

当該地域へのアクセスは、飛行機、JR、自動車が必要な手段に数えられる。ただし、大半の宿泊施設は空港や駅からすぐにアクセスできるほど近距離には立地していないため、自動車を利用しない利用客は送迎用のバスやタクシーなどの利用が必要となる。このような不便さを解消するべく、平成16（2004）年には、妙見温泉観光協会によって「温泉バス」が就行され、JR 隼人駅・JR 嘉例川駅・鹿児島空港といった利用客が多いアクセスポイントで順次乗降可能な交通手段が設けられた。しかし、後述の調査結果の分析でもあるように、温泉バスとして限定された本数と走行エリアのため、宿泊施設への主要なアクセス手段になりきれない現状がある。ゆえに、どうしても大型観光バスでのツアーを除き、レンタカーや自家用車による施設利用が主になっている現状がある。

表1 施設類型

	ホテル	ビジネス ホテル	旅館 (食事付)	旅館 (素泊)	旅館 (自炊)	民宿	ペンション	その他	合計
度数	11	9	22	4	6	4	1	5	62
パーセント	17.7	14.5	35.5	6.5	9.7	6.5	1.6	8.1	100.0

表2 地区別調査対象数（回収分）

	霧島	妙見	牧園	隼人・日当山	溝辺	国分	合計
度数	14	5	16	15	2	10	62
パーセント	22.6	8.1	25.8	24.2	3.2	16.1	100.0

表1は本調査対象とした宿泊施設の類型である。ホテルや旅館が多数を占めるが、ビジネスホテルやペンションといった営業形態も見られ、温泉をベースに多様な宿泊客のニーズに応える施設が混在している。表2は回収された宿泊施設の地区別集計である。前述のように、広範囲に宿泊施設が存在していることに加えて、地区別に回収率が一定でないため、厳密な地区のサンプルとはなっていない。またこの地区区分は住所を元に分けてあるので、温泉地区区分（霧島温泉郷、妙見温泉など）と一致してはいない。

表3 立地エリアと施設類型のクロス集計表

立地エリア	施設5分類					合計	
	ホテル	ビジネス ホテル	旅館 (食事付)	旅館(素 泊・自炊)	民宿/ペンシ ョン/その他		
	度数	3	0	7	0	4	14
霧島	立地エリアの%	21.4%	0.0%	50.0%	0.0%	28.6%	100.0%
	施設の%	27.3%	0.0%	31.8%	0.0%	40.0%	22.6%
	度数	3	0	8	3	2	16
牧園	立地エリアの%	18.8%	0.0%	50.0%	18.8%	12.5%	100.0%
	施設の%	27.3%	0.0%	36.4%	30.0%	20.0%	25.8%
	度数	4	4	4	7	3	22
妙見・溝 辺・隼人・ 日当山	立地エリアの%	18.2%	18.2%	18.2%	31.8%	13.6%	100.0%
	施設の%	36.4%	44.4%	18.2%	70.0%	30.0%	35.5%
	度数	1	5	3	0	1	10
国分	立地エリアの%	10.0%	50.0%	30.0%	0.0%	10.0%	100.0%
	施設の%	9.1%	55.6%	13.6%	0.0%	10.0%	16.1%
	度数	11	9	22	10	10	62
合計	立地エリアの%	17.7%	14.5%	35.5%	16.1%	16.1%	100.0%
	施設の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

表3は施設類型と対象地区（立地エリア）とのクロス集計表である。なお、統計処理のため各エリアの偏りを平均化するようにまとめて再区分した。観光や湯治を主目的とした施設が立地する地区（霧島・牧園）と、観光のみならずビジネス利用も射程に入れた宿泊施設が立地する妙見・溝辺・隼人・日当山・国分というように、調査対象地区の多様性を表す結果となっている。

宿泊施設の規模としては、客室数で最大339、最少3部屋（平均34.8、SD 55.5）、収容人数では最大1,100名、最少9名（平均110.6、SD 182.0）というように、これも多様性に富んだ施設が立地している。前述のように、南九州が観光ブームの対象となった頃に大量の観光客を収容することを目的に開業した宿泊施設とならんで、小規模ではあっても温泉からの景観をセールスポイントとする施設、昔ながらの自炊による長期滞在の湯治客向けの施設といった、施設立地の特性がばらつきを生み出していると考えられる。

このように、本調査対象地は、施設が志向する営業形態の面でも、また受け入れの様態の差異による施設規模の上からも多様な宿泊施設が存在している地域である。各宿泊施設は固有のスタイルをベースに、少人数の気ままな旅から、昔ながらの自炊道具を持参しての湯治、修学旅行などの団体旅行まで、多様なスタイルの観光客の利用に供されてきた。

観光振興と一口にいても、このような地域固有のいわば「観光エートス」を無視して施策的に盛り上げることは、決して地域の現実に沿うものになるはずもないであろう。観光立国・観光立県が叫ばれる今こそ、地域の観光実態をベースにした方向性が模索されるべきであると考ええる。

4. 霧島温泉観光の実状

前述のように、これからの観光を取り巻く状況は、外国人観光客の積極的な受け入れ、観光主体における高齢層の増加、多様な観光メニューの提供、インターネットを活用した情報化など、従来のような「待ち」の姿勢ではなく、積極的な顧客獲得手段を駆使した「売り」の姿勢を必要とするような様相を呈している。このような情勢の変化に、大分県の別府などと並んで古くから有名な観光地となっているこの地域の宿泊施設がどこまで対応の姿勢を見せているか、あるいは現に取り組んでいるかについて、ここでは取り上げてみる。調査項目に従い、「アクセス」「バリアフリーおよび外国人受け入れ体制の整備状況」「インターネットの活用」「はやとの風の利用状況」の5点に絞り、それぞれの対応・整備状況を確認しておく。

アクセスに関しては、宿泊施設が広域に点在するこの地域において、前述の観光列車「はやとの風」のようなアクセス手段の整備が、実際に観光の活性化にどのような影響を及ぼしているかについて確認する。バリアフリー化や外国人の受け入れ体制の整備に関しては、従来の利用客とは別の配慮を必要とし、また相応の設備投資も必要となる。大小様々な規模の宿泊施設がこのような変化にどのように対処しているのか。インターネットの活用に関しては、1990年代の急速な普及により、コンピュータの前に居ながらにして観光地の情報取得や宿泊施設への予約など、観光の行動に至るまでの情報収集方法が大きく変化した。それにより旅行代理店経由でなく宿泊施設自らの情報発信のウエイトが大きくなってきた。社会の変化に伴い観光も大きな転換を迫られている中、観光客の受け入れ施設はどのように対応できているのだろうか。

4・1 アクセスと宿泊状況

アクセス手段と宿泊施設の利用状況を見る前に、調査対象となった宿泊施設の利用客の発地先の動向を確認しておきたい。

表4-1、4-2は宿泊客の発地元の順位別の回答結果である（5位まで順位付けで回答）。知名度のある霧島温泉を抱えるとはいえ、宿泊客の発地は九州内

表4-1 来客地域1位

	度数	パーセント
鹿児島県内	26	41.9
鹿児島除く九州	28	45.2
関東	5	8.1
その他	1	1.6
無回答	2	3.2
合計	62	100.0

表4-2 来客地域2位

	度数	パーセント
鹿児島県内	14	22.6
鹿児島除く九州	23	37.1
関西	6	9.7
関東	8	12.9
無回答・非該当	11	17.7
合計	62	100.0

で占められている。これは霧島温泉地域が、県内では小旅行や湯治先として浸透していることや、九州圏内での移動の便の良さがこのような結果につながっていると考える。かつてのような団体ツアー旅行に加えて少人数での個人旅行が志向される傾向が高い現在では、近隣で手軽に余暇を楽しめる観光が好まれており、本州他県からは現時点で空路が短時間でアクセス手段に負うところが大きい鹿児島では、移動にかかる費用負担が軽い近県からの観光客が利用の大勢を占める。

表5 確保済み交通手段（1位のみ）

	度数	パーセント
チャーターバス	1	1.6
温泉バス	1	1.6
自家用車	55	88.7
レンタカー	1	1.6
タクシー	1	1.6
その他	1	1.6
無回答	2	3.2
合計	62	100.0

表6 確保済み送迎手段の有無と内訳

度数（パーセント）		度数（パーセント）	
あり	28 (45.2)	バス（所有）	21 (75.0)
		バス（契約）	1 (3.6)
		タクシー（契約）	2 (7.1)
		その他	4 (14.3)
		無回答	3 (10.7)
なし	31 (50.0)		
無回答	3 (4.8)		
合計	62 (100.0)		

施設利用のアクセス手段については表5、表6に示す通りとなった（5位まで順位付けで回答。表6の内訳については複数回答）。最も多いものは「自家用車」「レンタカー」であり、公共交通のアクセスが決して便利であるとはいえない同地域の特徴を表している結果ともいえる。あわせて宿泊施設保有の送迎手段の回答結果が表7である。

表7 送迎手段の有無と営業形態

	ホテル	ビジネスホテル	旅館 (食事付)	旅館 (素泊・自炊)	民宿/ペンション/その他	合計
送迎手段あり	8 (28.6)	3 (10.7)	15 (53.6)	1 (3.6)	1 (3.6)	28 (100.0)
送迎手段なし	2 (6.5)	6 (19.4)	7 (22.6)	9 (29.0)	7 (22.6)	31 (100.0)

公共交通に依存することが難しければ、宿泊施設側で送迎手段を確保しなければ利用者の足は遠のいてしまうが、半数の宿泊施設で「なし」が目立つ結果となった。送迎手段を有する施設では、自前でマイクロバスなどを保有して客足の送迎に供している施設が多い。

このように調査対象地域での宿泊施設の利用実態としては、宿泊客自身によるアクセス確保が一定程度必要であり、ある程度規模の大きい施設によっては自前の送迎手段を有している結果となっている（表7）。

4・2 バリアフリー化、外国人受け入れ体制の整備状況

バリアフリーへの整備状況や外国人受け入れへの体制整備に関しては表8、表9の通りである。特に外国人の受け入れ体制に関しては、8割近くの宿泊施設が十分な準備を整えていない状況がうかがえる。これも近隣の地域からの来訪者が多くを占める宿泊施設の現状から考えると、客層が限定されていることから、これら諸施設の整備が急迫な課題だと、それほど認識されていないと考えられる。また、小規模の宿泊施設では、これらの施設整備が財政的な負担を強いられ

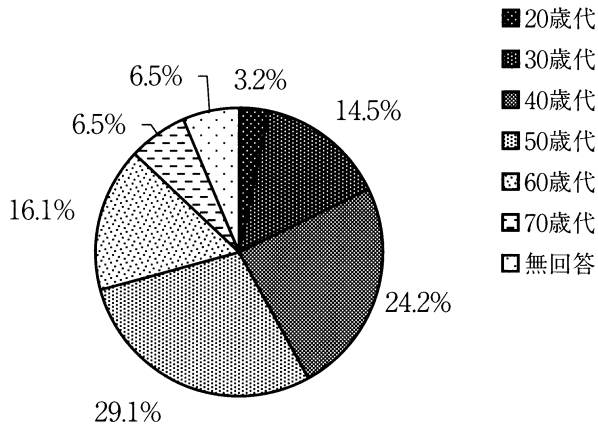


図5 宿泊施設利用者年齢層

表8 バリアフリー整備状況

バリアフリー 整備状況	施設5分類					合計	
	ホテル	ビジネス ホテル	旅館 (食事付)	旅館 (素泊・自炊)	民宿/ペンシ ョン/その他		
整備	度数	7	5	5	2	2	21
	バリアフリーの%	33.3%	23.8%	23.8%	9.5%	9.5%	100.0%
	施設の%	63.6%	62.5%	22.7%	22.2%	25.0%	36.2%
未整備	度数	4	3	17	7	6	37
	バリアフリーの%	10.8%	8.1%	45.9%	18.9%	16.2%	100.0%
	施設の%	36.4%	37.5%	77.3%	77.8%	75.0%	63.8%
合計	度数	11	8	22	9	8	58
	バリアフリーの%	19.0%	13.8%	37.9%	15.5%	13.8%	100.0%
	施設の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

表9 外国人受入体制の整備状況

外国人受入体 制整備状況	施設5分類					合計	
	ホテル	ビジネス ホテル	旅館 (食事付)	旅館 (素泊・自炊)	民宿/ペンシ ョン/その他		
整っている	度数	3	2	5	0	0	10
	外国人の受入の%	30.0%	20.0%	50.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	施設の%	27.3%	22.2%	22.7%	0.0%	0.0%	16.9%
あまり整って いない	度数	5	4	12	1	3	25
	外国人の受入の%	20.0%	16.0%	48.0%	4.0%	12.0%	100.0%
	施設の%	45.5%	44.4%	54.5%	11.1%	37.5%	42.4%
整っていない	度数	3	3	5	8	5	24
	外国人の受入の%	12.5%	12.5%	20.8%	33.3%	20.8%	100.0%
	施設の%	27.3%	33.3%	22.7%	88.9%	62.5%	40.7%
合計	度数	11	9	22	9	8	59
	外国人の受入の%	18.6%	15.3%	37.3%	15.3%	13.6%	100.0%
	施設の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

ることになることも、整備状況が不揃いな結果の一因と考えられる。

調査対象となった宿泊施設の利用者年齢層は、50歳代が最も多く、次いで40歳代、60歳代と中高年層に偏っている。今後、この世代がそのまま高齢化を迎えても利用し続けると考えるならば、バリアフリー化に関しては直面せざるをえない問題となるだろう（図6）。外国人の受け入れ体制に関しては、宿泊施設側の努力のみならず、鹿児島市内では既に行われているような観光スポットの行き先表示板などでの多言語表記など、自治体をあげての取り組み姿勢も必要である。

4・3 インターネット活用状況

情報化の流れは観光業界にも着実に浸透している。宿泊施設においては、自施設内部の紹介や景観の写真、宿泊予約などあらゆる情報提供について、ホームページの開設によって、印刷物を使わなくても低コストで観光客にアピールすることができる。調査結果でもホームページを活用しているという回答（質問はコンピュータ向けと携帯電話向けのサイト開設それぞれを聞いたがここでは合算した集計結果を掲載した）が75%にのぼり、規模の大小に関わりなく、情報化社会への対応を行っている（表10）。

表10 ホームページ（コンピュータ向け、携帯向けとも）活用状況

ホームページの活用状況	施設5分類					合計	
	ホテル	ビジネスホテル	旅館（食事付）	旅館（素泊・自炊）	民宿／ペンション／その他		
活用せず	度数	2	1	6	3	2	14
	HP 活用の%	14.3%	7.1%	42.9%	21.4%	14.3%	100.0%
	施設の%	20.0%	11.1%	30.0%	33.3%	25.0%	25.0%
活用している	度数	8	8	14	6	6	42
	HP 活用の%	19.0%	19.0%	33.3%	14.3%	14.3%	100.0%
	施設の%	80.0%	88.9%	70.0%	66.7%	75.0%	75.0%
合計	度数	10	9	20	9	8	56
	HP 活用の%	17.9%	16.1%	35.7%	16.1%	14.3%	100.0%
	施設の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

4・4 「はやとの風」の利用状況

最後に、九州新幹線部分開業と同時に運行開始された「はやとの風」の宿泊施設への影響について触れておく。「はやとの風」は、停車駅を最小限にして、主として肥薩線沿線の古い駅舎や昔ながらの沿線風景などを、時間的余裕を乗客に提供することで味わって貰う配慮で新たに運行された「観光列車」である。これにより、決して本数が多いとはいえなかった霧島温泉地域内の唯一の鉄道である肥薩線沿線とのアクセス手段が新たに追加されることになったが、実際の宿泊施設への影響については表11-1が示すとおり、劇的な変化をもたらすには至っていない（増加効果の内訳は複数回答のため総計は100%を超える。表11-2も同じ）。あわせて妙見温泉観光協会によって嘉例川駅舎、空港、妙見温泉などの限定エリアで運行されている「温泉バス」の運行による客入り効果では、変化なしという回答が多く、利用はあっても日帰りの「立ち寄り湯」の利用にとどまる結

果となっている（表11-2）。

表11-1 はやとの風による客入り動向の変化

	度数	パーセント		度数	パーセント
増加した	2	3.2	若年齢層の増加	5	38.5
			年配の客層が増加	7	53.8
やや増加傾向	11	17.7	家族連れの増加	3	23.1
			日帰り客の増加	0	0.0
			宿泊客の増加	5	38.5
あまり変化なし	46	74.2			
減少した	1	1.6			
無回答	2	3.2			
合計	62	100.0			

表11-2 温泉バス運行による変化

	度数	パーセント		度数	パーセント
増加した	1	1.6	若年齢層の増加	1	12.5
			年配の客層が増加	1	12.5
やや増加傾向	7	11.3	家族連れの増加	2	25.0
			日帰り客の増加	4	50.0
			宿泊客の増加	1	12.5
あまり変化なし	44	71.0			
減少した	3	4.8			
無回答	7	11.3			
合計	62	100.0			

4・1で述べたように、調査対象地域となった霧島温泉地域での宿泊施設利用は車（自家用車・レンタカー）を使用しているものが多かった。このような理由の1つには同地域の観光スポットが互いに離れていることがあげられる。短い日数で最大の満足を安い費用であげようとする観光スタイルでは、運行本数の少ないバスや観光スポットから離れたところを走る鉄道は使い勝手が悪いものとなろう。この意味で、「はやとの風」や「温泉バス」は、新規の観光客増加に寄与するというより、リピーターといわれる、複数回この地を訪れた経験のある観光客向けの移動手段と位置づけることが適切ではないか。これらの交通手段は、あらかじめ決めておいた宿泊施設と観光スポットしか訪れないという計画のもとに、幾多の観光スポットを網羅的にカバーしない移動手段を意図的に用いる観光スタイルにこそ適合する移動手段として捉える方が現実合っている。ここで取り上

げた移動手段は、顕著な観光の活性化に直結する手段というより、比較的「スロー」な観光を楽しむための「選択肢」の1つという位置づけが妥当であると考える。

おわりに

高速交通の利用による人口移動は、移動時間の短縮化による遠方からの客足を伸ばすメリットがある一方で、滞在時間も短縮化することがデメリットとしてあげられる。青森新幹線の開業は、若者の休日などを利用した購買目的での関東方面への流出を後押ししたという事実もある。現時点では部分開業であるが、企業の中には鹿児島島の営業所を引き上げて、短期滞在での営業活動に切り替える動きに呼応してか、鹿児島市内には観光のみを目的としないビジネスホテルの建設ラッシュが相次いだ。これが来る全面開業ということになると、客層、滞在時間などどのような人・物の移動が展開されるのかは予想もつかないことである。

観光の振興には交通手段などのインフラや情報化など新しい技術の導入のみならず、いかに既存の資源を継続的に提供し続けられるかということも重要なことである。平成18年度の『レジャー白書』では団塊世代と旅行についての意識調査結果を踏まえた特集が組まれており、これからの10年で重視する旅行計画では、「環境を重視する」と「現代的観光地より伝統的な場所へ行きたい」という意識が男女とも高率を示している（『レジャー白書2006』 100）。また、外国人にアピールしたい日本の魅力についての『レジャー白書2005』のレポートでも「温泉」が63%ほど（複数回答）を占めており第1位となっている（『レジャー白書』 112-114）。

このような志向からおぼろげではあるが、今後の社会の変化を見据えた観光地としての潜在力は霧島温泉地域にはあると思われる。しかし、政策レベルでの「観光立県」づくりを、個々の宿泊施設の努力にのみ依存したり、マクロなインフラ整備のみに注力するのでは、地域全体の観光振興はおぼつかないのではないか。団体客、個人客、湯治客、日帰り湯利用客など温泉利用に関して多様なニーズに応えられる資源をどのように活かすかは、各宿泊施設相互の連携や点で提供されてきた観光メニューの統合・連携など、発想の転換によるソフト面の開発にかかっている。既存の観光スタイルが出来上がっている霧島温泉地域の観光振興には、新たな温泉資源を活用した観光スタイルの構想が求められている。

本論文は、平成18年度文部科学省大学高度化推進特別経費（教育・学習方法等改善支援経費）および志學館大学社会調査実習等費を受けて実施した、平成18年度「社会調査実習」（霧島の温泉宿泊施設における観光・宿泊動向に関する調査）での成果をもとにしたものである。あわせて、本論は、同調査の成果報告書の「鹿児島、霧島の観光の実状について」（1－5ページ）を大幅に加筆、修正したものである。

最後に、ご多忙の中、本調査にご協力いただいた宿泊施設の皆様方に厚く御礼申し上げますとともに、平成18年度社会調査実習の受講学生に感謝いたします。

注

(1) 霧島温泉という名称は主として、霧島田口や牧園町高千穂を住所として所在する温泉宿泊施設一帯を指すものとして用いられ、それより南の地域での区域では、牧園町宿窪田や隼人町嘉例川を中心に妙見温泉や安楽温泉、隼人町内および姫城では日当山温泉と多岐にわたって使われている。本調査の対象宿泊施設はこれらすべてにまたがっていることから、本論では「霧島温泉地域」という呼称で便宜上一括して扱うことにする。

参考・参考文献

- 井口 貢 編著 『観光文化の振興と地域社会』 2002 ミネルヴァ書房
- 鹿児島県観光交流局観光課 「平成18年 鹿児島県観光統計」 2007
- 鹿児島県商工観光労働部観光課 「九州新幹線開業関連観光動向調査報告書」 2005
- 鹿児島市商工観光部 「鹿児島市商工観光概要 平成18年度版」 2006
- 厚生労働省統計表データベース www.dbtk.mhlw.go.jp/toukei/cgi/sse_kensaku 平成19年10月6日参照
- 国土交通省編 『観光白書』 各年度版
- 国土交通省総合政策局観光部門ホームページ www.mlit.go.jp/sogoseisaku/kanko/061220kihonho_u.html 平成19年2月参照
- 財団法人 日本交通公社 観光文化事業部 『2006 旅行者動向』 2006
- 財団法人 社会産業生産性本部 『レジャー白書』 各年度版
- 社団法人 日本観光協会 『平成14年度観光の実態と志向』 2003
- ジョン・アーリ（加太宏邦 訳）『観光のまなざし 現代社会におけるレジャーと旅行』 1995 法政大学出版会（John Urry, *The Tourist Gaze Leisure and Travel in Contemporary Societies*, 1990, Sage.）
- 総合観光学会 編 『観光の新たな潮流』 2003 同文館出版
- 観光まちづくり研究会 編 『新たな観光まちづくりの挑戦』 2002 ぎょうせい
- 高橋 光幸 「これからの高齢者観光振興のあり方」 97-109 総合観光学会 編 2003 所収
- 西日本新聞社 『九州データ・ブック2007』 2007 西日本新聞社

松橋 功 2002 「国民の観光ニーズをつかむ」 152-168 観光まちづくり研究会 編
2002所収

YOMIURI ONLINE 宮崎地域 企画・連載「駅 Miyazaki」www.yomiuri.co.jp/e-japan/miyazaki/kik_aku/017/2.htm 2007年10月2日参照

47都道府県 2006年度版-白地図, 世界地図, 日本地図が無料 www.freemap.jp/japan/ja_todoufuken3.html (図5の作図に利用)